

1998, 99年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」について

井上 芳保

■ 蘭信三報告「満州移民研究における社会学的方法の可能性」

1998年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」として第11回と第12回が開催された。第11回の記録「現代文化研究における〈文化〉概念と分析ツールに関する覚え書き：アニメーション『新世紀エヴァンゲリオン』を手がかりとして」はすでに本誌8巻2号に掲載してある。第12回として99年2月27日、京都大学留学生センター（大学院人間環境学研究科）の蘭信三助教授をお招きして「満州移民研究における社会学的方法の可能性」という報告をしていただいた。蘭助教授は歴史社会学，エスニシティの社会学が御専門であり，特に「満州移民」と「中国帰国者」の問題についての綿密な研究を一貫して続けて来られた。1994年にはその成果をまとめた著作『「満州移民」の歴史社会学』（行路社）を，また1998年には『「中国帰国者」をめぐる地域社会の変容と排除に関する比較社会学的研究』（文部省科学研究費研究成果報告書）をそれぞれ刊行しておられる。

今回は「満州移民」に的を絞ってお話していただいたが，この研究会の趣旨をくみとってであろうが，方法論の話題にもかなりの時間をあてて下さった。すなわち一筋縄では説明できない「満州移民」の複雑な生活史と意識に切り込んでいく方法として，ライフヒストリー法，「恥知らずの折衷主義」などについて触れられている。対象となるのが「語られたもの」である以上，何がどのように語られているかという視点も必要となる。歴史学とはそのじつ表象（ディスクール）の研究である。したがって歴史社会学的アプローチにおいて慎重な手続きが必要となることを我々は痛感した。また国家と民族，個人とナショナリズム，戦争体験といった問題にも踏み込んだ密度の濃い内容の報告となった。例によって他学部，他大学などからも研究者が訪れ，有益な研究会となったといえよう。

今回ここに掲載する原稿は，そのときのテープ起こし原稿を基に蘭助教授が大幅に手を加えて下さったものである。講演記録の体裁をとっているが，実質的には論文といえる内容である。全体として実際の講演録よりも整序され，すっきりした形になったといえよう。お忙しい中，このような優れた原稿を本誌のために用意して下さいました蘭助教授には改めて感謝申し上げます。なお，基となったテープ起こし作業は私のゼミの富士田貴之君があたってくれた。労をねぎらいたい。

■ 1999年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」：辻勝次報告「阪神・淡路大震災と社会断層」，川端亮報告「非定型データのコーディングシステムとその利用」

1999年度の「社会情報調査の方法に関する研究会」として第13回と第14回が開催された。

今回は二つとも2000年1月29日の開催となった。すなわち第13回として立命館大学産業社会学部の辻勝次教授の「阪神・淡路大震災と社会断層」という報告を、第14回として大阪大学人間科学部の川端亮助教授の「非定型データのコーディングシステムとその利用」という報告をそれぞれしていただいた。その記録については本誌次号にでも掲載したいと考えている。

■ 「社会調査士」資格についての討論会

また今回は二つの研究会終了後に「社会調査士」資格についての討論会も開催された。これは本学部で目下カリキュラム改定に伴い「社会調査士」資格を発行の可能性についての検討が進められているのであるが、その参考とするために企画された討論会である。本学部からは石井、小内、高橋、井上の四名が参加した。

大阪大学、立命館大学ではすでに学内で「社会調査士」資格を発行している。それぞれの大学でこの問題の当事者となっている両講師から現状と問題点について話していただき、討論に入った。その結果、①両大学とも現状では予想以上に取得希望者が少ないこと、②にもかかわらず教員の負担がかなり大きくなること、③現状では資格取得が即就職に役立つというわけでもないこと（資格の社会的承認がまだ十分ではないこと）、④資格発行の要件が専門性という点で卓越したものとはなっていないこと（社会学の研究のために求められる調査の専門性と企業や行政の現場で求められている調査の専門性との間には相違があること）⑤関西社会学会として統一的な「社会調査士」資格を発行する動きにはなっていないことなどが確認された。

「社会情報調査の方法に関する研究会」の開催一覧

	実施日	報告者	報告テーマ	記録
第 1 回	1993年 6 月 4 日	大石 裕	「地域情報化研究の課題」	録音テープ保管
第 2 回	1993年 7 月 29 日	好井裕明	「意味と社会システム：螺旋運動としてのエスノメソドロジー」	紀要 3 巻 2 号に論文掲載
第 3 回	1994年 7 月 28 日	高橋和子	「非定型データの分析方法」	紀要 4 巻 2 号に論文掲載
第 4 回	1994年 10 月 7 日	吉見俊哉	「国民祭典論のための序論的考察：運動会の思想」	『思想』11月号の論文参照
第 5 回	1995年 7 月 1 日	瀬地山角	「東アジアの家父長制」	紀要 5 巻 2 号に講演録掲載
第 6 回	1995年 12 月 16 日	松田博公	「オウム報道の構図と問題点」	紀要 5 巻 2 号に講演録掲載
第 7 回	1996年 11 月 7 日	亘 明志	「メディアと権力」	紀要 6 巻 2 号に講演録掲載
第 8 回	1997年 3 月 8 日	山崎晶子	「差別のエスノメソドロジーから Media Space project へ」	録音テープ保管
第 9 回	1998年 1 月 31 日	谷 富夫	「エスニシティ研究における「世代間生活史法」の試み」	紀要 7 巻 2 号に論文掲載
第 10 回	1998年 3 月 3 日	大谷信介	「都市的状況と友人ネットワーク：5 大学比較調査の結果から」	録音テープ保管
第 11 回	1998年 12 月 12 日	高橋 準	「ポピュラー文化研究における概念と分析装置」	紀要 8 巻 2 号に論文掲載
第 12 回	1999年 2 月 27 日	蘭 信三	「満州移民研究における社会学的方法の可能性」	紀要 9 巻 2 号に論文掲載
第 13 回	2000年 1 月 29 日	辻 勝次	「阪神・淡路大震災と社会断層：災害調査のフィールド体験」	
第 14 回	2000年 1 月 29 日	川端 亮	「非定型データのコーディングシステムとその利用：信仰における霊能の意味へのアプローチ」	